

福島県

子どもの生活実態に関するアンケート調査 調査結果概要

(令和5年2月10日に公表した調査結果(速報)に詳しい内容と分析を加えたものとなっています。)

第1章 調査の概要

1 調査目的

県内の小学生、中学生、高校生の約12万人を対象に、ヤングケアラーと思われる子どもを早期に発見し、支援につなげる仕組みづくりの検討を行うため、家族のお世話の状況など、生活実態に関するアンケート調査を実施した。

2 調査対象

県内の小学校5～6年生、中学校全学年、高校全学年の全児童・生徒の合計約12万人

①小学校	学校数	397校	児童・生徒数	28,972人
②中学校	学校数	220校	児童・生徒数	45,543人
③高校	学校数	97校	児童・生徒数	44,563人
			合計	119,078人

3 回収方法

対象の学校へ児童・生徒向けの調査票を送付し、学校を通じて配布・回収

4 調査時期

令和4年9月～令和4年11月

5 回収結果

■回答率

学校種別	対象者	回答数	回答率
小学校	28,972人	24,858人	85.8%
中学校	45,543人	39,258人	86.2%
高校生(全日制)	43,092人	37,666人	87.4%
高校生(定時制・通信制)	1,471人	607人	41.3%
合計	119,078人	102,389人	86.0%

■家族のお世話をしていると回答した者(該当者)の率

学校種別	回答数	該当者数	該当率
小学校	24,858人	1,986人	8.0%
中学校	39,258人	2,417人	6.2%
高校生(全日制)	37,666人	1,581人	4.2%
高校生(定時制・通信制)	607人	65人	10.7%
合計	102,389人	6,049人	5.9%

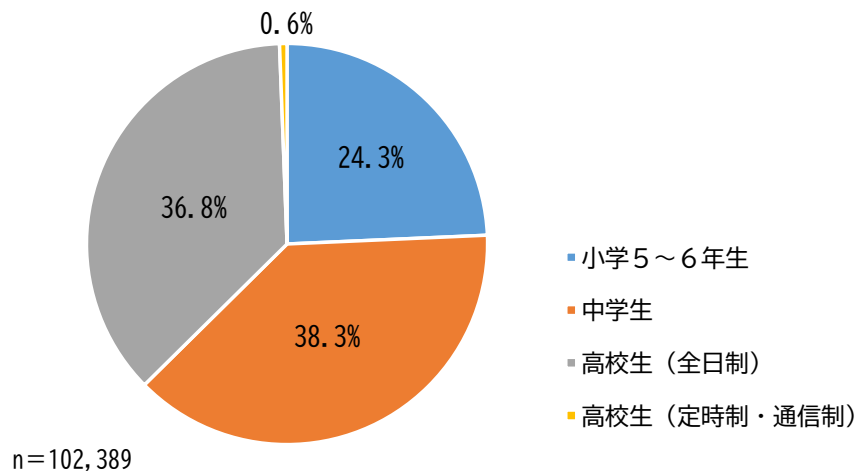
※本調査は、調査票における設問「問3 家族の中で、あなたが「お世話」をしている人はいますか。」で「いる」と回答した方を該当者(集計対象者)とし分析した。

調査数(n=number of cases)とは、回答者総数あるいは分類別の回答者数のこと。

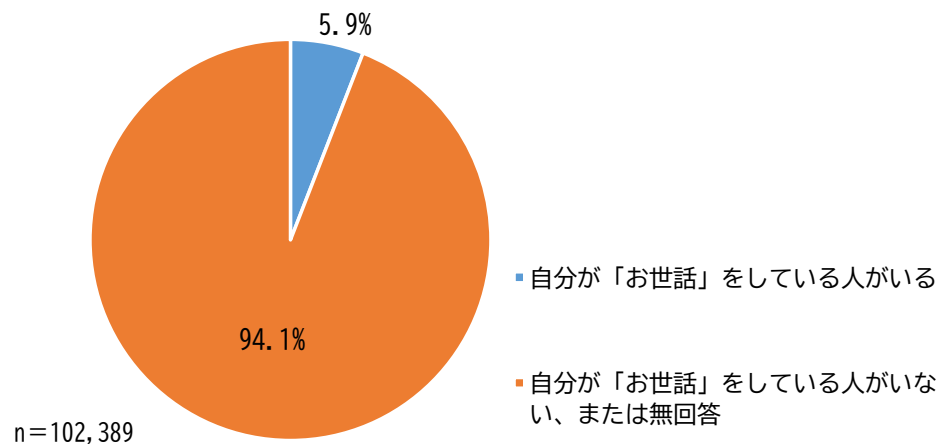
1 全体における回答割合と該当者の割合

- ▶全体における回答割合は、小学5～6年生は24.3%、中学生は38.3%、高校生（全日制）は36.8%、高校生（定時制・通信制）は0.6%となった。
- ▶全体における「お世話をしている人がいる」と回答した該当者の割合は5.9%。

《全体における回答割合》



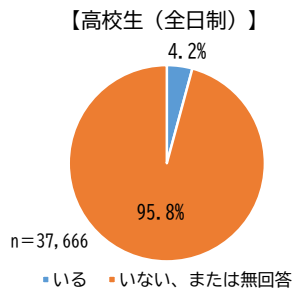
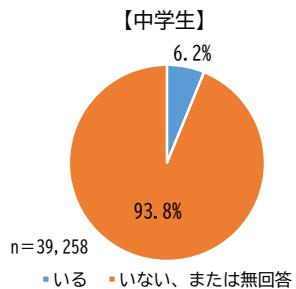
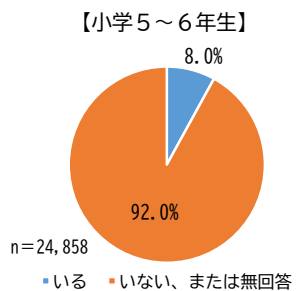
《全体における「お世話をしている人がいる」と回答した該当者の割合》



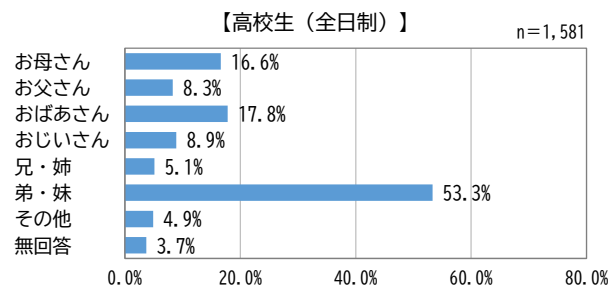
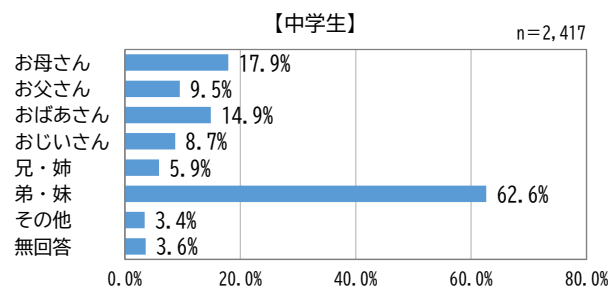
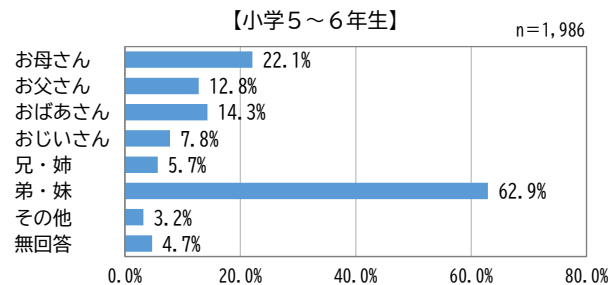
2 お世話を必要としている家族・お世話をしていることで経験したこと（困っていること）

- ▶お世話を必要としている家族は、「弟・妹」が最も高く、それ以外では「お母さん」、「おばあさん」と続く。
- ▶お世話をすることで、「自分の時間が取れない」、「宿題など勉強する時間がない」などの負担がある。

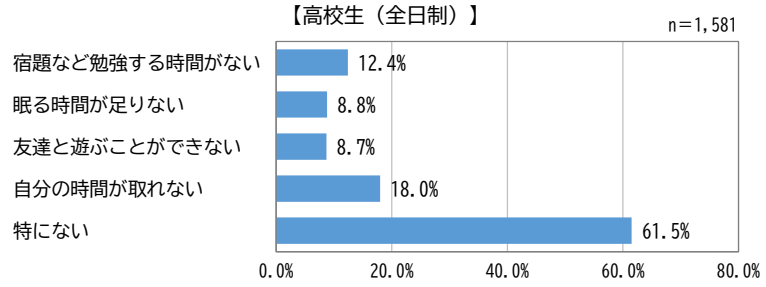
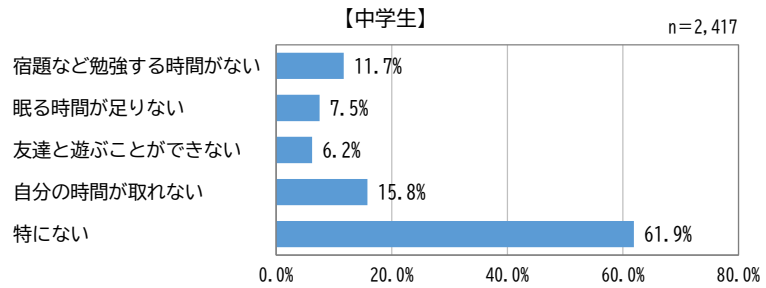
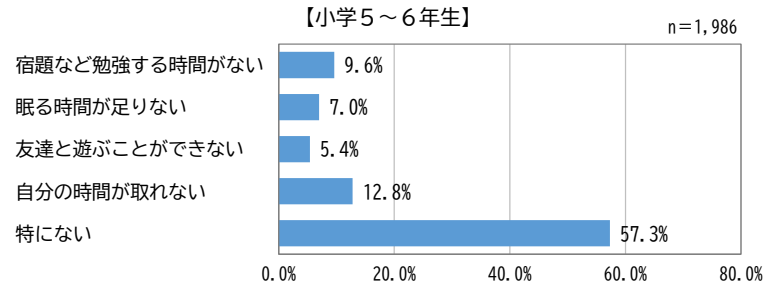
◀お世話をしている家族の有無▶



◀お世話を必要としている家族▶

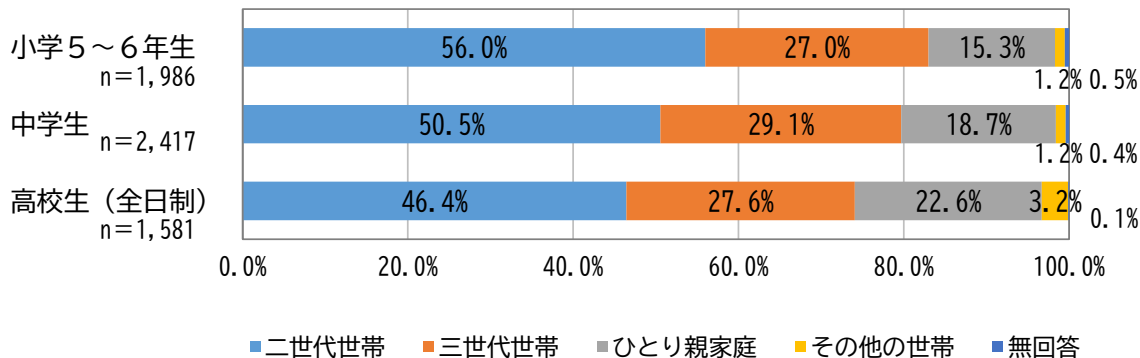
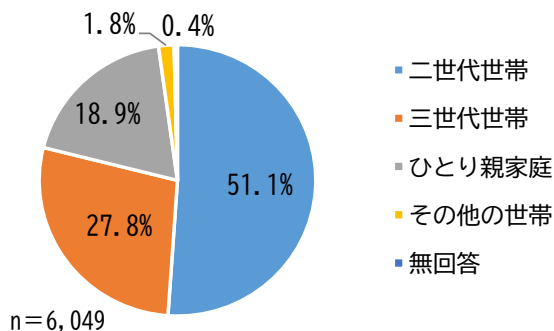


◀お世話をしていることで経験したこと▶



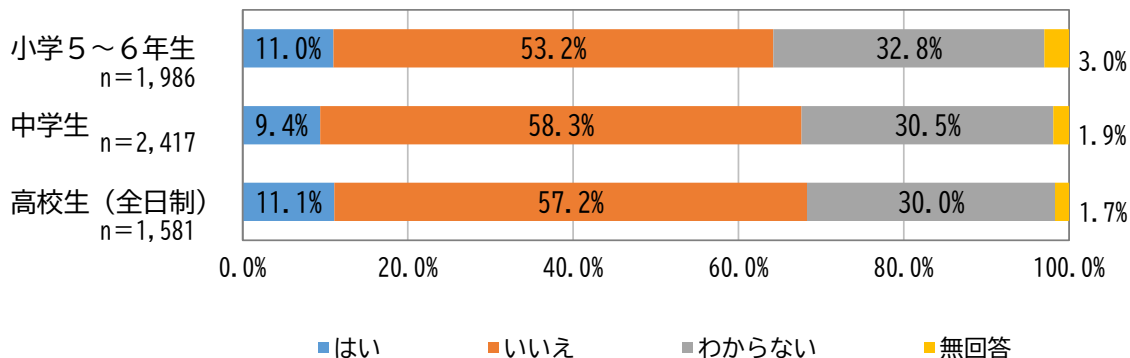
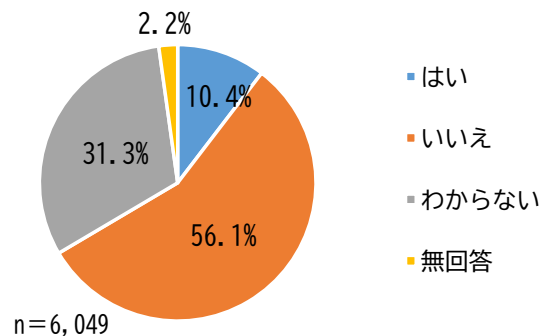
3 該当者における世帯区分（家族構成）

▶小学5～6年生、中学生は、「二世帯世帯」が5割台と高い。高校生（全日制）は、「ひとり親家庭」が22.6%と他に比べ高い。 ※「三世帯世帯」の割合は国調査より高い（国調査令和2年、令和3年の平均18.0%）。



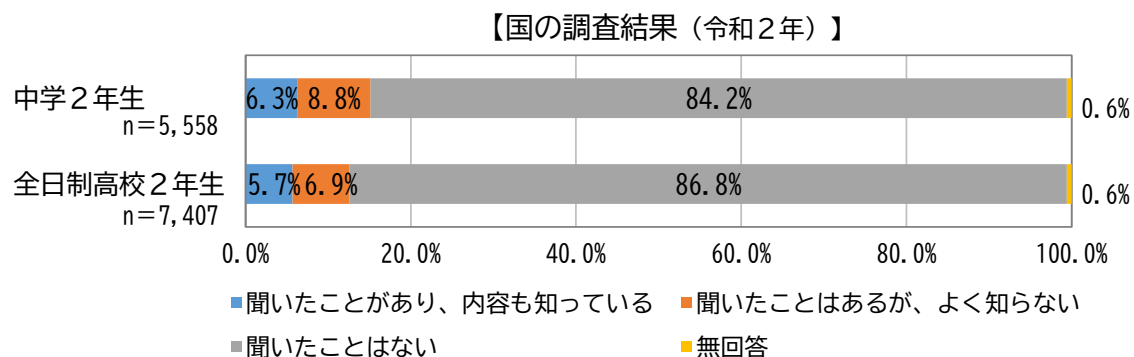
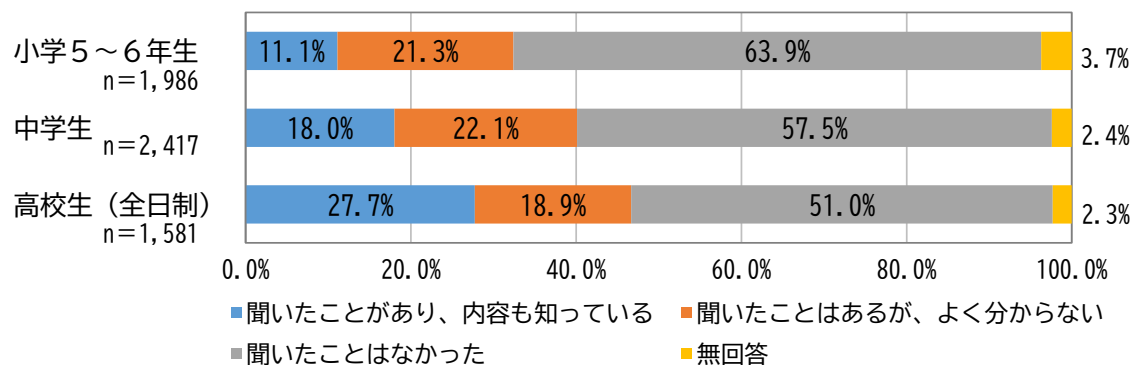
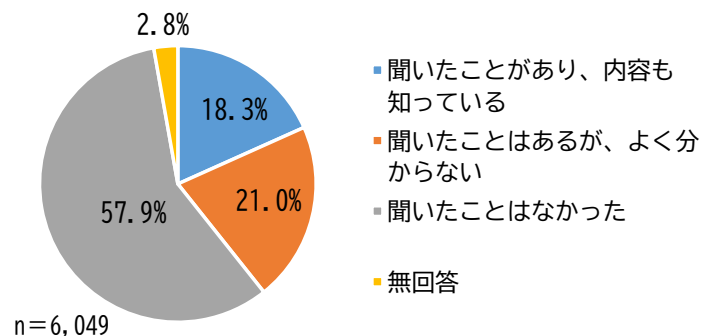
4 ヤングケアラーの自覚（自分がヤングケアラーであると思うか）

▶小学5～6年生は11.0%、中学生は9.4%、高校生（全日制）は11.1%がヤングケアラーの自覚あり。



5 家族の中で「お世話をしている人がいる」と回答した該当者のヤングケアラーの認知度

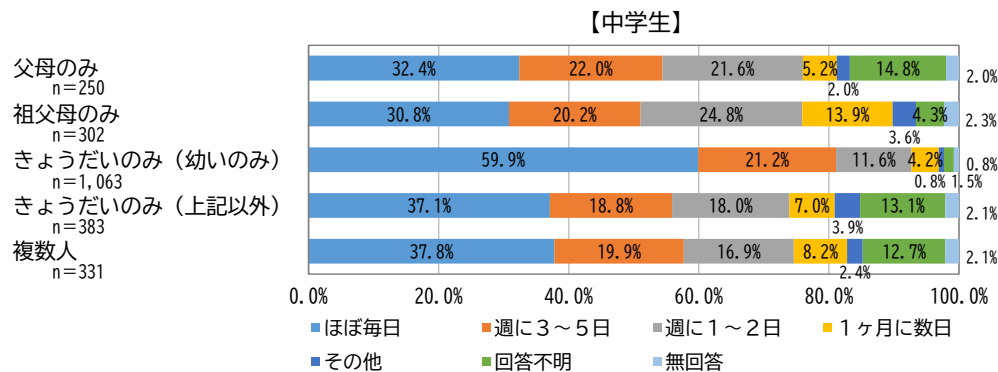
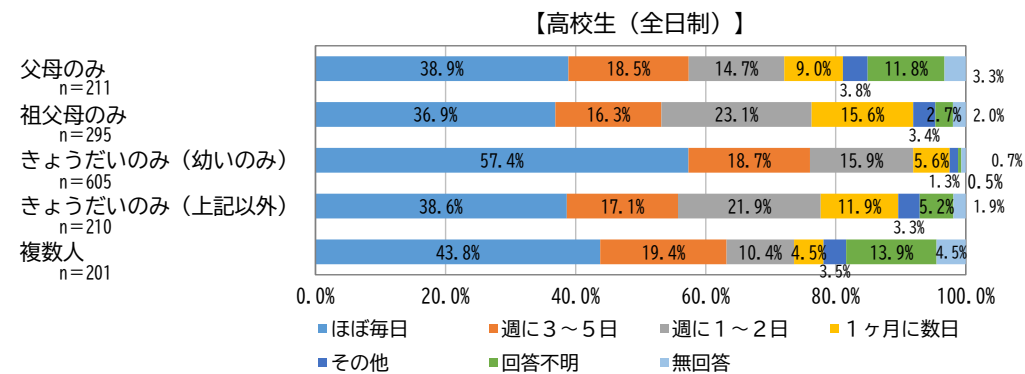
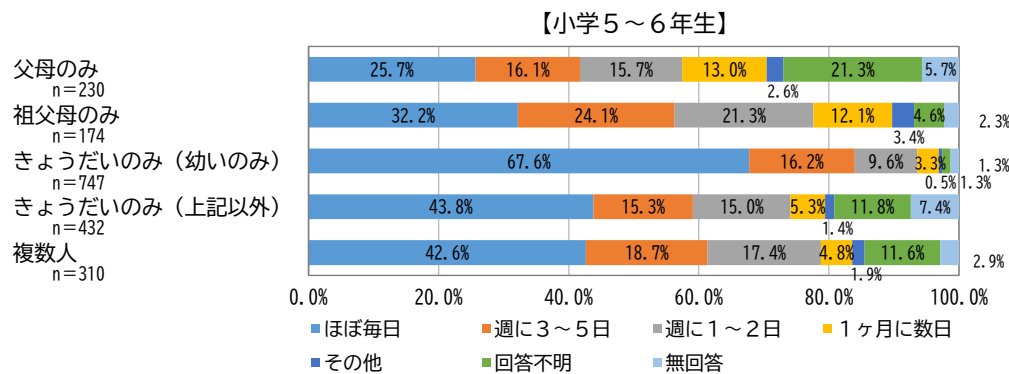
- ▶国の調査結果と比べて認知度は高いものの、全体で5割以上が「聞いたことはなかった」と回答しており、認知度は高くない。
- ▶年齢が上がるにしたがって認知度が高くなる。



※国の調査は、ヤングケアラー非該当者も含む回答のため、単純な比較はできない。

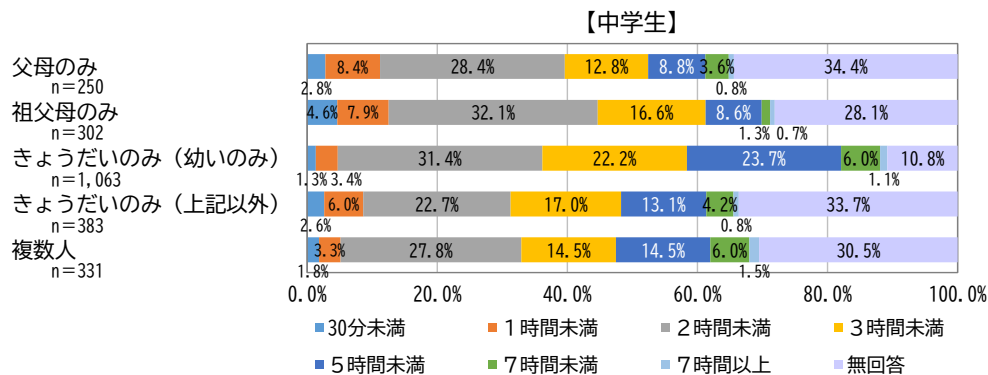
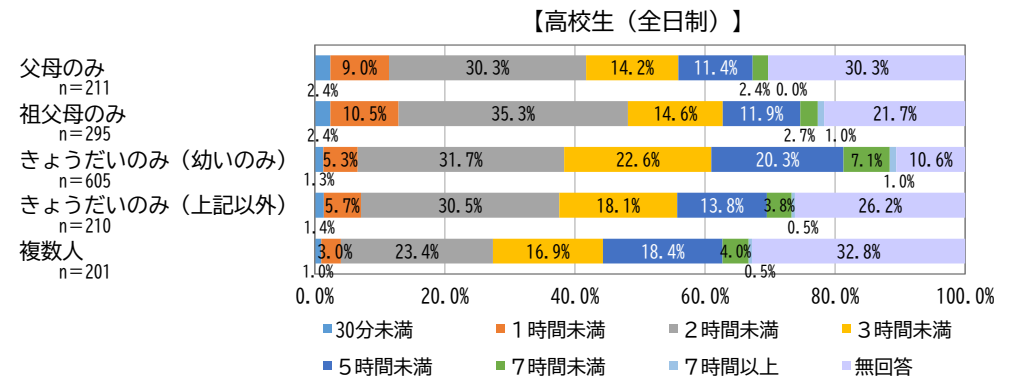
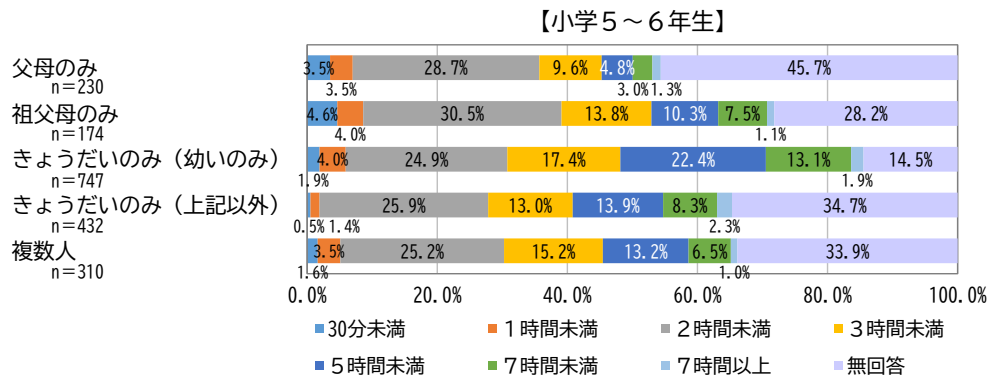
6 お世話をしている人とお世話の頻度

- ▶きょうだいのみ（自分より若い人のみ）を毎日お世話している人が5～6割となっている。
- ▶高校生（全日制）においては、父母、祖父母を毎日お世話している人の割合が小学5～6年生、中学生より高い。



7 お世話をしている人と平日1日あたりのお世話に費やす時間

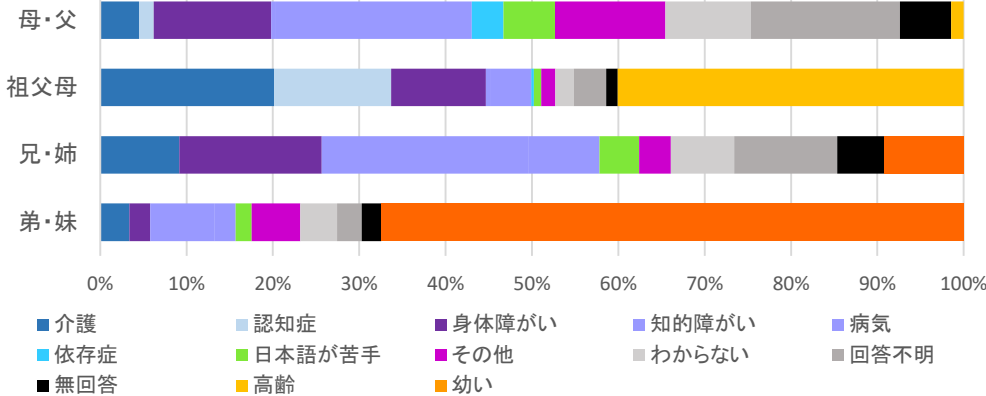
- ▶お世話をしている人が異なっても、お世話に費やす時間は「2時間未満」が高い。
- ▶お世話をしている人を「きょうだいのみ（幼い人のみ）」と選択した人がお世話に費やす時間（3時間以上）が長い。



その他(お世話の理由と内容)のデータ(報告書P4～8参照)

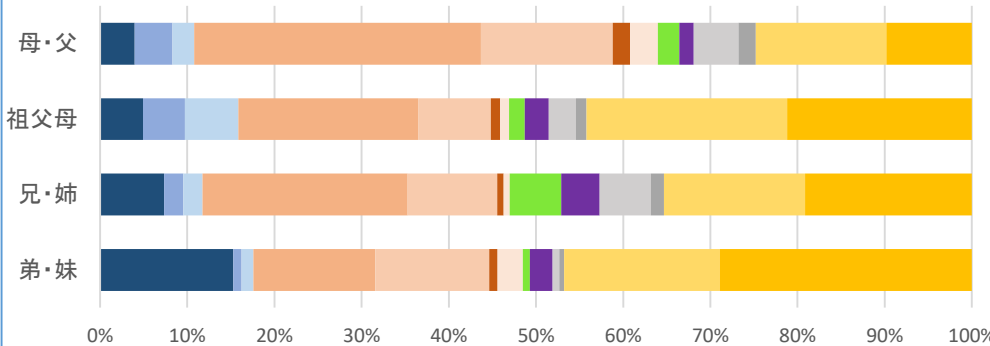
家族ごとのお世話の理由:高校生(全日制)

弟・妹以外:介護・介助を要する理由5割



高校生ほど負担が大きい

家族ごとのお世話の内容:高校生(全日制)



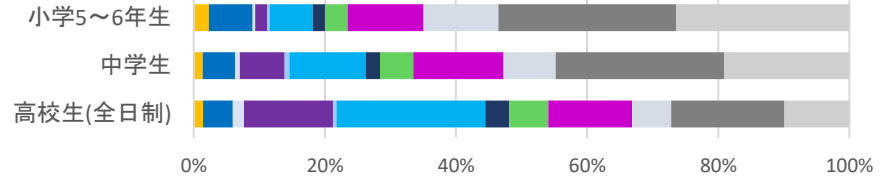
介護・介助に類するお世話

家事(狭義)

日常的な関りに類するお世話

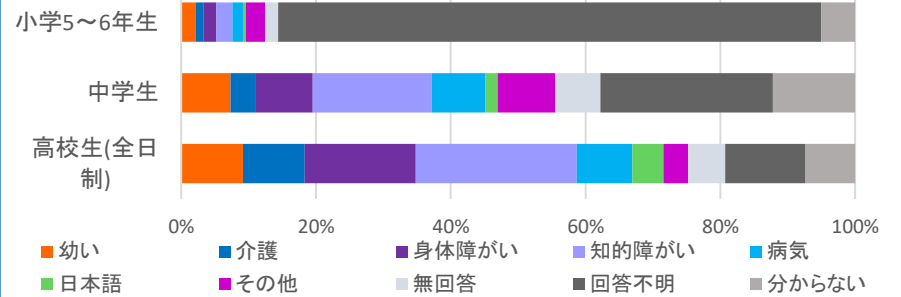
- 入浴トイレのお世話
- 病院付添
- 薬の管理
- 家事
- 買い物等
- お金の管理
- 送り迎え
- 通訳
- その他
- 回答不明
- 無回答
- 話を聞く
- 見守り

母・父のお世話の理由:学校区分別



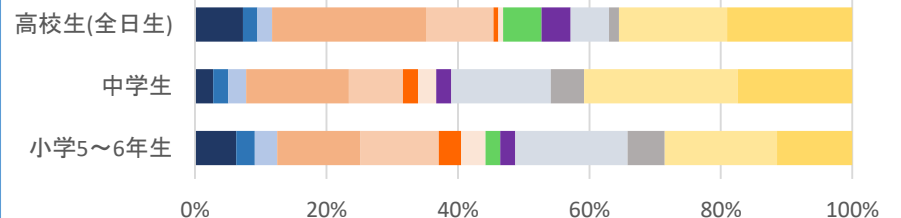
小学生ほど家族の状況を認識していないと推測される回答が多い

兄・姉のお世話の理由:学校区分別



兄・姉のお世話の内容:学校区分別

介護・介助、家事の割合が比較的高いが、既存の制度・サービスでは対応できないニーズも確認



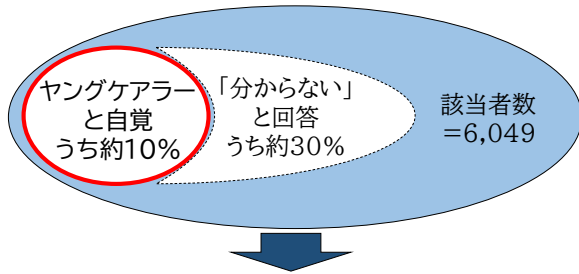
- 入浴トイレのお世話
- 病院付添
- 薬の管理
- 家事
- 買い物等
- お金の管理
- 送り迎え
- 通訳
- その他
- 回答不明
- 無回答
- 話を聞く
- 見守り

第4章 調査結果に基づく考察（今後の方向性）

1 ヤングケアラー支援の必要性

① お世話の状況(ヤングケアラーの分布)

家族をお世話しているのは回答者の5.9%
(国調査と同程度)



② お世話を担うことによる影響

子どもの時期に
経験すべき体験に支障
健康への影響、
学校生活への支障

必要

学校を中心とした
早期発見
関係機関が連携し、
子どもの時間確保を
支援

③ お世話の2つのパターン（内容）

1. 介護・介助に類するお世話

対象: 家族の障がい、介護、疾病 等
内容: トイレのお世話、入浴のお世話、
通院への同行、服薬の管理等
⇒ 本来、大人が恒常的に行うべき世話

2. 日常的な関わりに類するお世話

対象: 幼いきょうだい 等
内容: 大人と一緒に食事の準備、
見守り等のお世話
⇒ 本来、大人が中心になって行うべき世話

2 子どもの時間を確保する支援の拡充

① 支援を行う上で配慮すべき事項

▲ 高校生の負担の大きさ

- ・ケアニーズの高い家族、介護・介助に類するお世話の割合の高さ
- ・高校生では手軽な相談方法のニーズが高い

家族の中で「介護力」とされているおそれ

▲ 子どもはお世話をする「理由」がわからないことが多い

- ・小中学生の、お世話をしている理由が「わからない」と回答する割合の高さ

大人に相談しない理由となっている可能性

配慮

柱2

② お世話による負担軽減のための方策

1. 既存福祉サービスの有効活用

子どもを「介護力」としないための障害福祉や介護等の既存福祉サービスを活用(認定)

※ 支援につながりにくい家庭があることに注意

2. 既存福祉サービスでは解決できないニーズへの対応

「子育て世帯訪問支援事業」の活用等による既存の福祉サービスでは解決できないニーズへの対応

※ 想定: 食事の準備、洗濯、掃除、
買い物代行、保育所送迎等

3 支援のために必要な体制の整備

① 早期発見・支援のための体制整備

柱1

1. 相談窓口の強化

悩みを抱えるヤングケアラーが相談しやすい相談体制の整備

SNS相談窓口の開設 等

2. 社会的認知度の向上に向けた取組

子ども、学校、福祉を含めた団体、地域全体への広報啓発

早期発見できる体制構築

連携

② 円滑な支援に向けた多機関連携

児童福祉、子育て、教育、高齢、障がい、医療、生活困窮等の関連制度の連携による支援及びネットワークの整備

